
とある運命と刻印之者

あしゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある運命と刻印之者

【Nコード】

N2235Y

【作者名】

あしゆき

【あらすじ】

運命、それは既に決まっている事柄。運命、それは抗えぬもの。運命、それは絶対的絶望

これは運命によって振り回されたとある少年がとある都市で運命を切り開く物語である

果たして、彼が切り開いた未来の先は希望か、絶望か

『とある運命と刻印之者』

始まります

プロローグ（前書き）

どうも、無謀な挑戦に挑もうと思います。あしゆきです

まさかの完結すらしてないのに小説を増やすという暴挙

お許しください

今回のテーマは『運命』です

それでは今回もキバって行くぜ！

プロローグ

突然だが、運命は信じるか？

よく言うだろう？運命の出会い、運命の赤い糸、ロマンチックだよな

それって全部神様が決めてるらしいぜ？

北欧ならノルン、ギリシャならラケシス・クロートー・アトロポス。
他にも色々いるが代表的なのはこれぐらいだろう、コイツらは全員
運命の女神だ

「過去が決まっているなら、未来も決まっている」

どこぞの偉人が言った言葉だ

なら、全ては運命なのか？宿命なのか？

もしそうなら、俺は女神を全員ぶん殴ってる

運命なんて知ったことか、宿命なんて蹴り飛ばせ

自分の未来は自分で切り開く、女神なんざくそくらえ

これが俺のスタイル、これが俺の生き方

誰にも邪魔はさせねえ、俺の未来を邪魔するフテエ奴らは殴って蹴
つて叩きのめす

逃げねえ退かねえ振り向かねえし剃らさねえ

俺が死ぬ、その時まで

ピピピピ！

おっと、そろそろ目覚めの時間だな

ピピピピカチン

「ふああ・・・ちて、今日はどんなことがあるのかねえ」

未だ見ぬ未来に俺「
に^{すへまきごみ}麻刻」はそう呟いた

プロローグ（後書き）

いかがだったでしょうか？

大体こんなノリで行こうと思います

ご感想よろしくお願いします

それではまた次回！

第一話『高校生in超電磁砲』（前書き）

この作品は超電磁砲から始めていきたいと思います

台詞など、細かいところは覚えてませんが

それでは今回もキバって行くぜ！

第一話『高校生in超電磁砲』

何故こうなった。後ろから電撃が放たれるなか、俺はそう思った

「待てやアアアアア!!」

いやいや、止まったら死ぬからね？そんな何万Wありそんな攻撃受けたら丸焦げじゃすまないからnってうわ！今かすったぞ！危ねえだろ！

俺は逃げ切るためにさらにスピードを上げた

同時に、事の原因を思い出す

あれは、学校の帰り。俺の親友『上条当麻』と帰り道の途中のことだった

回想

『いやー、ここ最近不幸なことがなくて上条さんは幸せですよ』

と当麻はホクホク顔で言う。まあ確かに最近の当麻は不幸じゃないよな。五百円玉拾うし、目覚まし時計はちゃんと動くし、不良にも目をつけられない。けれどどこかムカつくのは俺だけじゃないはず

『そうかよ。で、それがどうしたんだよ当麻？』

『なに、この幸せを当麻君にも分けてあげようかと思ってな。一緒にファミレスに行かねえか？奢るぞ』

『上条さん、俺アンタに一生着いてくよ！』

ちよつど金欠だったんだよ！いやー、これで今日は生き延びることが出来る！

そう思ってた矢先

ビー！エラーエラー！

『はー！？ちよ！？！？なんでカードが出てこないんだよ！』

金を取りにコンビニのATMを使うとエラーを起こし、カードを取りだそうとするとエラーが起こる

『当麻、これ以上お前に着いていけないわ』

『手のひら返すの早えな!?!』

そつだよな、こいつに幸福なんて訪れる訳がないんだよな・・・期待した俺が馬鹿だった

『とりあえず、店員さんに言っつていい』

『ハア、そつするわ』

そつ言っつて行きとは真逆のテンションでコンビニの中へ入っつていった

当麻がコンビニに入っつて暫くたつた、今だにあのバカは帰っつてこない。まあどうせまた不幸なことに巻き込まれてるんだろつうな

と、そんな時。下品な男の声がする。首を動かして見ると一人の女の子に男が五人で囲んでる

ああ、またか。またなのかお前は。そう思ったのも仕方ないだろう、何故なら、俺はその女の子の顔に見覚えがあったからだ

明るい茶髪にヘアピン、そして来ている常盤台の制服。間違いない、
『御坂美琴』だ

またアイツ絡まれてんのか？ハア、また被害がでるのか・・・男達、
ご愁傷様

俺は赤の他人の男達に手を合わせた後巻き込まれたくないため、当
麻を置いてそそくさと帰ろうとした

その時、稲妻が走る

振り返ると電撃の槍が自分に向けて放たれていた。俺はそれを『右
手』で受け止めた

右手に触れた電撃はあらゆる方向に拡散し、消えていく

電撃が止むと、その先にはビリビリと放電している御坂がいた

『・・・お前なあ。殺す気が!?!』

『死んでないんだから、いいでしょ?別に』

よかねえよ!後一秒反応すんのが遅れたら死ぬところだったわ!

『それより、ここであつたが百年目!決着つけさせてもらつたわ!』

そう言つてさらに放電する御坂、正直言つて勝てる気がしない

『・・・戦略的撤退!』

こつこつ時は逃げるに限る

『あ、コラ!待ちなさい!』

『どわあ!危ねえ!』

逃がすまいと電撃を放ちながら追ってくる御坂

くそ！こんな所で死んでたまるか！

回想終了

で冒頭に戻るってわけか

「ってかしつこいんだよ！どこまで追ってくる気だ！」

「アンタが戦うまでよ！」

それってほぼずっとなって意味だよな！？

「ふざけんな！美少女に手を出せるか！」

「ハア！？び、美少女って・・・」

「お前しかいねえだろが！自分の部屋の鏡よく見てこい！」

「...」

どわぁ！何で撃ってくるんだよ！？ってん？

「……………」

「ハア、ハア、ハア。よ、ようやく止まったわね？それじゃあこっちから」

「おい、ちよっと待て」

俺は一旦止まって御坂の額に手を当てる

「ひゃ……………！な、何すんのよ！？」

「いや、顔が赤かったからさ。熱でも出したんじゃないかと」

本当だぜ？さっきまで顔真っ赤だったし、熱が出たんじゃねえか？
って心配になるくらいに

うん、少し熱いな。こりや微熱かな？

「……………ちよっと失礼」

「へ？キヤ・・・！」

俺は御坂を横抱きにする

まったく熱出してんなら追っかけてくんなよな

「ちょ！？なにこれ！？離しなさいよ！」

「暴れんな病人。微熱なんだろう？送ってってやる」

こつこつというのは当麻の役目だと思っただがな

「はあ！？わ、私は熱なんか出して！」

「嘘つけ、だったらなんでそんな熱いんだよ？」

「じ、これは、その」

？なんでさらに顔を赤くするんだよ？まあいいや

「ほら、行くぞ。案内しろ」

「ってかせめておんぶにしろーいー!」

あーあー聞こえないー!俺は御坂を背負って常盤台の寮に向かっ
た
であつた

第一話『高校生in超電磁砲』（後書き）

次回はいよいよ超電磁砲一話目

とりあえず、一言だけ言わせてください

佐天さアアアん!!!

それではまた次回！

第二話『猛暑日in先輩後輩』（前書き）

・・・ここまで人気がないと、さすがに傷つきますね

感想を、感想をください！

それでは今回もキバって行くぜ！

第二話『猛暑日in先輩後輩』

季節は夏、七月中旬。学園都市を幽霊のようにフラフラと歩く少年が一人

「・・・暑い。暇だ」

彼は”ニ麻刻” ちょっとわけありな高校二年生である。普通の学生なら友達と一緒に笑いあっている時間帯に、何故彼が一人なのか？理由は簡単、刻の友人は全員予定があつて遊べなかつたのだ。部屋にいても暇だし、というわけで街にくりだしたのはいいが、夏の暑さにダウン。今や涼みを求め彷徨い歩く亡霊だ

「くそ・・・どこか涼める場所はないのか？」

そう愚痴りながら刻は周りを見渡す、そして見渡すかぎりのカップル、カップルカップルカップル。どうやら今日は何かのサービスデーのようだ

「・・・リア充共が、爆破しろ」

そうすればこの暑さもいくらかマシになるんじゃないか、と本気で思った刻だった。その時、一つのファミレスが視界に入る。確かに、

ファミレスは飲み物もあるし冷房もついている。だが、それあまつてカップルが多い

近づいてファミレスに立つてる旗を見る、旗には『カップル様3割引き!』と書かれている

「・・・リア充が多い理由はこれか」

滅びろリア充、むしろ俺が滅ぼしてやろうか。と迫真の籠った顔で旗を睨みつける

その時、ファミレスに叫び声が木霊する。見ると御坂がこちらに指をさして口をパクパクしていた

面倒ごとの予感がした刻だった

ファミレス

「へえ、辻麻さんって高二なんですか？」

「まあね。勉強が難しくやってられないよ」

「・・・何でアンタはそんなに馴染んでんのよ！」

先程のファミレスの中、刻は四人の女の子に囲まれていた

一人は御坂、ツインテールの上品な子”白井黒子”、ストレートの元気な子”佐天涙子”、そして花畑”初春飾利”以上四名である

お互いに自己紹介を済ませ、今では世間話をするほど馴染んでいる

なお、刻は三人に会ってから十分しか経っていない

「それで、何でアンタはここにいるわけ？」

「いやさ、俺も結構暇でさ。することなかったんだよ」

腕を組んで不機嫌そうにそう言う御坂にケラケラと笑いながら答える刻、御坂の額に怒りマークが増える

「ならもついいでしょ？とっとと帰んなさいよ」

「あ、三人とも後でメアド教えてくれ」

「無視すんなゴラァ！」

立ち上がって抗議する御坂に対して刻はうんざりした表情で御坂を見る

「な、何よ、その表情？」

「いや、お前も年頃なんだからもっとキヤピキヤピしたら・・・ないな」

「ムカつく！殴り飛ばしたい！」

ウガァー！と頭をかきむしりながら叫ぶ御坂、それを見て勝ち誇った笑みを浮かべる刻。残りの三人は苦笑いを浮かべていた

「それよりお兄様、この先の予定はありまして？」

「・・・そのお兄様つてのやめてくれないか？」

「いえいえ。お兄様はお兄様ですから」

そんなわけの分からない理由を言う白井、刻はがくりと肩を落とす
ていた。何故彼女が刻をお兄様と言うのか、それは刻本人にも分
らない。いや、正確には忘れてる。何でも去年会ったらしいが、
刻には全く身に覚えがなかった

「ハア、ないけど。それがどうしたの？」

「いえ、これから皆さんと遊びに行くのですけれど。お兄様もい
がですか？」

刻は少し悩むが、どうせ帰っても一人なので別にいいかと行くこと
にした

「んじゃ。お供させていただけますかね」

「ちょ、ちょっと！何勝手に決めてんのよ！皆の意見を聞きなさい
よ！」

御坂は慌てながらそう言う。刻はそこまで嫌なのか、と考えていたが。実際は恥ずかしがっているだけである

意見を聞くために周りを見渡す

「私は別にいいですよ？に麻さん面白いですし」

「わ、私も」

「え!？」

二人の肯定的な答えに驚く御坂、そして全員の視線が御坂に向けられる

「う・・・わ、分かったわよ!」

「というわけで。お願いしますわお兄様」

「・・・白井テメエ、最初からそれが目的だったな？」

とある公園、そこには一つのクレープ屋と長蛇の列、そして遊びに来た五人の姿があった

「いえいえ、まさかそんな。ただこんな長蛇の列の中、女の子二人で行かすほどお兄様は残酷ではございませんよね？」

訳すところな長蛇の列の中、まさか男であるテメエが女の子二人を置いて休むわけねえよな？ということである

「・・・後で覚えとけよ、白井」

「忘れましたわ」

そんな事を言い合いながらもその顔イキイキしてる二人なのであった

「ハア、んじゃ行ってくるわ」

そう言った刻の目に何故かショックを受けた顔の御坂が写る

「・・・けど一人じゃ持ちきれねえな。御坂、悪いけど着いてきてくれないか？」

「!しょ、しょうがないわね。手伝ってあげる」

そう言う御坂だが明らかに頬は緩んでいた

そして長蛇の列に並ぶ、しかし長い、ひたすら長い。二人の番は中々来ない。その間にも夏の日差しはジリジリと二人を差す

そして数十分後、ようやく二人の番が来る

「すみません、お待たせしました」

「・・・何やってんすか？先輩？」

「ああ、何だに麻か」

刻だと知った瞬間に態度を逆にしたのは刻の高校の三年生、”土師は藁わら童”刻とは一年からの知り合いである

「私も所謂バイトというやりたくなくなってな。今日始めてみたんだ」

「いやいや、冷やし中華みたいなノリで言われても困るから。ってか先輩これ以上金いるんすか？」

実は土師薫はとある大手企業の一人娘、金など腐るほどある

「所謂自分の金、という欲しくなってな。午前8時から働いている。所謂死ぬ気モード、というやつだな」

「いや、今日始めたばかりでこの人気はおかしいっすよ。何したんすか？」

「なに、ただ試してみたただけだよ。所謂物で釣る、という行為をな」

それだ、と土師薫は目の前の緑の蛙を指差す

「・・・何これ？ケ○ッピ―？」

「ゲコ太、というマスコットらしい。まあ所謂ゲテモノだな」

子供には人気のようだが、とおもっくそゲコ太を否定する土師藁。刻は思わず苦笑いを浮かべる

「んじゃあとりあえずこれとこれとこれとこれ、でお願いします」

「かしこまった。それ出来たぞ」

「速えなおい！まだ二秒しかたつてねえぞ！」

返事をした二秒後に四つ全てを渡す土師藁。これにはさすがの刻もツッコまざるおえなかった

「辻麻と話している間に用意をしていた。なに、これくらい軽いものだ。所謂加速装置というものだ」

「先輩サイボーグじゃないじゃないっすか。まあいいスけど」

当たり前だろと言わんばかりの土師藁、刻の中で土師藁の謎がますます深まった

「合計で〇〇〇円になる」

「あれ？安くないっすか？」

「なに、所謂カップル料金というやつだよ」

ピキツと空気が死ぬ。後ろでは何やら煙出たような音がするがこの
際にしない刻であった、とりあえずドヤ顔でこちらを見てくるこ
のお嬢様を何とかしなければと刻は行動に移す

「・・・先輩、この際カップルとか置いとくッス。けど、数を見て
ください。四個ですよね？俺甘いもの嫌いって知ってるッスよね？
しかも後ろの三人に気づいてるッスよね？まさか俺が四股かけてる
とでも？」

「ん？なんだ？所謂四股は悪いことなのか？いいじゃないか、それ
だけ愛されているということだし」

「そういうことじゃないッス！ってかやっぱり言葉の意味知らずに
言ったなこの野郎！」

「おおそうだ。所謂オマケだ、持っていけ」

「話そらすなよ！つてかいらねえよ！」

「よかつたな、これが所謂最後の一個だぞ」

「だからいらねえよ！」

と漫才繰り広げていると、後ろから何か倒れる音がする。振り向くと御坂がorzの姿勢で項垂れていた

しかも「最後の・・・一個」などという怨念の籠った言葉が聞こえてくる。それを偶然にも聞いてしまった刻は目の前にあるゲコ太に視線を移す、ゲコ太の目は『さあ、僕をその子へ・・・なに、捨てられるのは慣れてるさ』と言っているように見えた。刻は迷うことなくゲコ太を握り御坂の前に差し出す

「あゝ、いるか？」

「えー！いいの!?!」

「まあ、その。ほら、俺って両生類嫌いだし」

刻の言葉に先程の負のオーラが嘘のように消え目を輝かせる御坂、その様子に若干引きながらもゲコ太を差し出す刻。すると御坂は光の速さで奪い取り大事そうに抱き抱えた。その時に見えたゲコ太の目が『デユフフww美琴ちゃんの貧乳サイコーwww』と言っている風に見えた、ゲコ太が少し羨ましくなった刻だった

「あ、ありがとう」

「気にすんな、それじゃあ先輩、自分はこれで」

そう言つて刻は御坂の分のクレープを渡した後、残りの三人にクレープを渡しに行った

残された御坂は貰ったゲコ太を見ながら頬を赤く染めながらにやけていた

「（むう、何か面白くないな）」

土師蕨は自分の心の中で出来た怒りにもよく似た感情に頭を悩ませていた

その時、公園の外から爆発音が響く

第二話『猛暑日in先輩後輩』（後書き）

やっと書けた、次は戦闘か

・・・頑張れ、俺

初春？なにそれ？新しい花の名前？

しつこいようですが、本当に感想をお願いします

それではまた次回

第三話『銀行強盗in死屍累々』（前書き）

まさかのオリジナル展開、どうしてこうなった

ご注意！今回はキャラ崩壊、オリジナル能力が出ます

そしてキャラによっては空気になる可能性が大です！お気をつけください！

更に戦闘がグダグダです！

それでは今回もキバって行くぜ！

第三話 『銀行強盗 in 死屍累々』

突如、公園の外から爆発音が響く

その音で我に帰った御坂は首を振り回すように辺りを見渡す。見えたのは煙を吹き出している銀行、そしてそれから出てくる四人の覆面の男。その手には袋と銃を持っている

それから導き出される答えは一つ、銀行強盗。その時、クレープを食べていた『風紀委員』の二人も動き出していた

「初春！『風紀委員』に連絡を！」

「了解しました！すぐに私も行きます！」

白井はクレープを一口で食べ初春に指示、初春は念のためにと持ってきた通信機を出し馴れた手つきで行動する。御坂も自分にも出来ることはないかと白井の名を呼ぶ

「黒子！」

「いけませんわお姉さま！」

白井は片手を肩の高さまで上げ横に突き出す。こっちに来るなど言うように

「これから先は『風紀委員』の仕事、お姉さまは今度こそそこでお待ちになってくださいな」

白井は自身の能力『空間移動』 テレポート で現場に飛んだ。残された御坂は何をするわけでもなくただ棒立ちをしていた

一方刻はというと

「え？一人男の子が足りない？」

炎や銃弾が飛び交っている現場に無謀にも向かおうとしていたバスガイドの女性を止めて話を佐天と一緒に聞いていた。

「は、はい！行き時にはいたんですが、先程数えるといつのまにか！」

「・・・わかりました、私にも手伝わせてください！」

「勿論、俺も出来る限りのことはします」

「はい！ありがとうございます！」

こんな危ない所に子供一人でいたら命の危険がある。そう考えた二人は快く引き受けた。その後こちらにやって来た御坂も合流、話を聞くと二人と同じく快く引き受けた。とりあえず三人は探す方向と範囲を決めそれぞれのルートに別れた

再び視点は替わって現場

そこでは『風紀委員』と銀行強盗による戦いが繰り広げられている

いや、どうやら決着が着いたようだ

「グハッ！」

「これでチェックメイト、ですわ」

白井は既に四人いた銀行強盗の内二人を撃退し、その場に余裕の表情で立っていた

「ひ、な、なあ！やべえよ！速く逃げねえと！」

「落ち着けバカ！けどこんな状況だ、逃げるのには賛成だ。解散！」

二人の男は別々の方向に逃げる、片方は白井が、そしてもう片方は

「逃がしません」

初春飾利が

「チツ！どけえ！」

銃を前に突きだし狙いをつける男、しかし初春は慌てることなくその手を地面につける

すると手からパキパキと音が鳴りコンクリートは冷たく凍っていく。そしてそれはあつという間に男の足に届きその足を凍てつけさせる

「な！能力者！」

初春は凍ったアスファルトを踏みしめながら男に近づき男の額に触れる。すると男は顔を真っ赤にして気絶した

『熱量操作』 コンデンサー それが初春飾利の能力。その名の通り有機物無機物関係なく、その物体の熱量を操る『大能力者』 レベル4 の能力

凍らせたのはコンクリートの熱量を下げ、男は体温を上げた。その結果、男は熱中症になり気絶したのだ

「ギャ！」

一方白井の方は背後からドロップキック一発で男は倒れた、白井は事件を終わらせた達成感と共に安堵の息吐く

「やりましたね白井さん！」

「喜んでいる暇はないですわよ？ みつともなく倒れている犯人達を捕まえないと」

その時、白井と初春の体に異常が起こる

「(なっ、なん、ですの？いきなり、体が重く……!)」

白井と初春は地面に座り込み息を荒くする

「……ハッ、どうやら効いてきたみたいだな」

男は後頭部を押さえながら立ち上がる、その口からは紫の吐息が出ている

「能力、者？」

「そうだ！これが俺の能力『死屍累々』　ポイズンダウンー　！その力は、自分の体に聞いてみるよ？」

そう言ったとたん、自分の体が動かなくなる

「(違う、これは動かないってことじゃない。足の神経が)」

『死屍累々』その力は神経毒、身体中のあらとあらゆる穴から毒素を吐き出し吸った相手の自由を奪う、そして最後には死に至る。自分以外は地面に倒れふし、屍と化す。まさに死屍累々

「け、ど。他の、人達は」

「ああ、それなら。そいつらもう死んでるぜ？」

男がケロツと言った言葉に二人は首を右往左往に動かす、見ると男達は呼吸をしていなかった

「おや？その調子だと死体を見るのは始めてかな？ハハハツ！安心しろよ！テメエらもあと少しでそうなる。じゃあな」

言うだけ言って男はその場を去ろうとする。その男の視界に男の子が入る

「んだあガキ、邪魔なんだよ」

男の子は動かない、いや動けない。恐怖のあまり体がすくんでいるのだ

「・・・屍決定」

男はそう言っつて全身から紫のガスを吹き出す。ガスが男の子に触れようとした、その時

男の子が消える

「!?!」

そして電撃が男を襲つ、男はそれをガスを推進力にして避ける

「・・・黒子、これからは個人的ケンカだから、手え出させてもら
うわよ」

「佐天、病院に連絡を」

「は、はい!」

刻は担いだ男の子を佐天に渡してそう言った

『超能力者』序列第三位『超電磁砲』電撃姫、御坂美琴。そして訳
ありの高校生、辻麻刻が『死屍累々』に挑む

「ハハハッ！なんだ、テメエらは？」

「外道に名乗る名はない（わよ）」

「・・・テメエら屍決定」

ゴシユウ！と噴き出しながら拳を握る。そして打ち出す。しかし二人はそれをひらりと避けて一撃を加える

「グッ！」

がむしゃらに腕を振る、しかし当たるわけもなく背後から蹴りが飛ぶ

「ガッ！ん野郎！！」

男は転がりながらも二人を殺すために二人を見据える、しかし瞬きの間に消える

男は立ち上がり辺りを見渡す。気配すらしない、不気味な状態だった

「こつちだ」

ドゴォ！と男の脇腹に蹴りがめり込む、また転がされる。そして消える

「クソが！だったらここら一带を！」

ブシュー！と全身から紫のガスを吹き出す。いくら隠れようが速かるうが吸い込んでしまえばこちらの勝利

そしてそれは辺り一面に広がる。はずだった

「ああ？」

広がらない、まるで見えない何かに遮られているかのようにガスはそこに留まる

そしてガスは止まらずただ貯まっていく、しばらくするとガスの円形のドームが出来る

そして御坂はその隙を見逃さなかった

「・・・食らいなさい」

御坂はその手に一枚のコインを持つ、そして弾く

コインは宙を舞い、ゆっくりと落ちてくる

放電した手を突きだす、コインが落ちてくる

標準はガスの中に見える影、御坂は狙いを定めコインもう一度弾き、放った

轟音を出して駆ける緋色の閃光、それは壁を突き抜け正確に男に命中する

男は宙を舞い、五メートル程地面を滑る。男は運がよかったのか、死んではいなかった

その後、男の出したガスは突然宙で燃え上がる。そして塵も残さず燃え尽きた

こうして、事件は終わりを告げた

「ハア、今日はとんでもない一日だったわね」

「全くだ、金は無くなる。事件に巻き込まれる。俺なんか憑いてんじゃないか？」

「だとしたら近づかないでよね。私にも被害が出るじゃない」

「・・・お前、今俺のワースト3に入る程の悪口言ったよ？」

事件が終わったその後、二人は暗い夜道の中それぞれが帰る場所へと歩いていた。あの後、二人は『警備員』 アンチスキル に根掘り葉掘りあったことを聞かれ、その後はずっと説教。終わった頃には刻はゲッソリしていたが、御坂は慣れていたのでか疲れる程度ですんでいた

「それにしても、二人が無事でよかったわ」

「だな、あのゲコ太医者には感謝だな」

『死屍累々』の毒を受けた二人はゲコ太似の医者によって無事回復、しかしまだ毒素が残ってるかもしれないと言われて念のため入院中である

「それにしても、気になるわね。あの壁を張った奴と燃やした奴」

あの時、男の周りにだけ壁を張ったのは御坂ではない。それにガスを燃やしたのも彼女でもない

彼女の能力は電気を操ること、障壁を張ったり燃やしたりするのは分野が違う

いるのだ、ガスが広がるの防ぐために壁を張った者と広がるのを阻止するために燃やした者が

「ま、いいじゃねえか。終わりよければ全てよしってな」

「・・・アンタが能天気なだけじゃないの？」

「お前よくそんな暴言ホイホイ吐けるね。一応お嬢様だよな？」

「一応、よ」

騒ぎながら帰り道を歩く、二人。その後ろ姿とてもお似合いに見えるのは、気のせいではないだろう

第三話『銀行強盗in死屍累々』（後書き）

佐天さんの空気が異常、バカな！佐天スキーのこの俺が！このよ
うな失態を！

んん！失礼しました

今回はついに日常編！& a m p ; 『虚空事件』！

次回『日常in非日常』科学と魔術が交差する時、その目に刻め！

第四話 『日常i、非日常』 (前書き)

な、なんとか更新完了…

なお、書き方は全体的に変わっています。と言っても『…』が『…』に変わっただけですけど、一応お気をつけください

それでは今回もキバって行くぜ！

第四話『日常と非日常』

ここは学園都市、常識が常識になる場所。そんな学園都市のとある高校、ここでは毎日のように人が楽しく愉快地騒いでいる

「うーす、おはよう」

彼もまたその高校の一学生、名前は”亡麻刻” 少し訳ありの高校生だ

「おはよう刻」

そう言ったのは幸薄そうな少年、名前は”上条当麻” その右手に宿る不思議な力のせいで不幸な毎日を送る可哀想な少年

「おはようさんスベちゃん」

「おはようだにゃースベちゃん」

青い少年が”青髪ピアス”、金髪なのが”土御門元春”。以上紹介した四名は仲良し組、クラスメイトからは『デルタフォース』と恐れられている。なお、その中には刻は入っていない

「今日って何か面倒な授業あったっけ？」

「三時限目の能力開発、担当仁村だぜい」

「うえ、マジかよ。せつかく今日は珍しく遅刻せずにきたのに…ハア、不幸だ」

「まあうつとしいからニャーアイツ。いちいちしつこくねちねち言ってくるし」

「おい青髪、お前の守備範囲だろ？なんとかしろよ」

「無茶言わんとしてや、さすがの僕でも仁村は無理やで」

そんな雑談をしながら笑いあう四人、とそこに

「何？またなんか企んでるわけ貴様らは？」

そう言って四人の前に現れたのは”吹寄制理”このクラスのまとめ役のようなものだ。そして馬鹿三人組『デルタフォース』のストッパーでもある

「企んでるって、酷いぜい吹寄」

「そうそう、僕らは楽しく談笑してただけやで」

「そつだそつだ！」

「…ハア。辻麻、本当？」

「おう、今日の時間割りについて話し合ってただけだ」

「そつ、ならいいわ」

「…なんやえらいスベヤんの言うことは信じるやん」

「貴様らと違って辻麻は信用出来るのよ」

「ですよー、と声を合わせ言うバカ三人。開き直った三人に吹寄はこめかみを押さえ、刻は苦笑いを浮かべていた

そして時間は流れて昼休み、屋上にて刻と吹寄は昼食をとっていた。
何故、二人が一緒に昼食をとっているのか、そこら辺は察してほしい

「は？『虚空事件 グラビトン』？」

「そうよ」

刻が箸を進める間、吹寄はそう言った

「『虚空事件』ってあれだろ？アルミを爆弾に変えて爆発を起こして次々と被害を出してるってやつ」

「そうよ。念のために言おうと思ってね」

「…何で俺に言うのさ、当麻に言えよ。アイツ絶対巻き込まれるから」

「上条がどうなったって別にいいのよ。私は当麻さえ無事ならそれでいいんだから」

ジト目で言った刻に吹寄はやれやれと言った感じでスゴいことをさらうと言っ

「…お前なあ。まだ諦めてなかったのかよ」

「もちろん。恋する乙女はそう簡単に止められないのよ」

もうお分かりの方もいるだろうが、吹寄は刻のことが好きである。いや、愛してると言ってもいい。理由は色々あるが、ぶっちゃけ言っただけの吹寄の一目惚れである

だが最初に言っておく、刻の容姿は普通である。どこかの化物級のように女顔でもないし、どこぞのナンパ好きのようにイケメンでもない。どこにでもいる普通の顔である。なのに何故、吹寄は刻に惚れたのか？曰く内面に惚れたらしい。吹寄は告白したが、その時は吹寄と一切の面識がなかった。当然刻は振ったが吹寄は諦めず、ずっとアタックし続けている

「俺なんかよりずっといい男なんて腐るほどいるのによ」

「見た目はね。けど、辻麻以上優しい奴はこの世にいないわ。私は辻麻のそんな所に惚れたの、例え辻麻が私を嫌っていても、私は辻麻を、刻を愛し続けるわ」

「……………たく。よくそんな恥ずかしい台詞吐けるよな」

「あら、頬が赤いわよに麻。照れてる？」

「て、照れてなんかねえよ。ああもう！いただきます！」

照れ隠しなのか、刻は吹寄手製の弁当をガツガツと食べ始める。吹寄はそれを見てクスクスと笑う

「おいしい？」

「……………うまいよ」

「そう…よかった」

今日も学園都市は平和である

時は進んで放課後、ここセブンスミストに三人の影があった

それは先日刻と出会った”御坂美琴””佐天涙子””初春飾利”の三人だ

「はあ、やっぱり人がいっぱいですね」

「まあ新装開店したからね。人気なんじゃないかな」

「そんなところでしょうね。それにしても、黒子も来ればよかったのに」

ポツリと御坂は呟いた。白井がいないのは現在『風紀委員』の仕事で忙しいからである、先日から続いている『虚空事件』のせいで仕事が貯まってるのだ

「ん？あれって…（ゲコ太！）」

そんな御坂の目にゲコ太のパジャマが入る、御坂は目を光らせ近づく

「いいなあ…これ」

御坂はパジャマを持ち上げる、どこからどう見てもゲコ太のパジャマである。御坂はキョロキョロと周りを見る、佐天と初春は下着コーナーでじやれている

「（いいよね、ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ着てみるだけなんだから!）」

いざ、御坂は周りに誰もいないことを確認したあとパジャマを自分の前まで持ち上げる

とそこに

「あれ、御坂？何してんだ？」

突然背後から声かけられる、振り向くとそこには刻がいた。とにかく、御坂はパジャマを一瞬で畳んで元あった場所になおす

「な、なんでここにいのよ?」

「ん?いや、ちょっとな」

「お兄ちゃん！」

と向こうから小さな女の子が走ってくる。恐らく、女の子は刻のことを呼んだんだろう。しかし、その呼び方に疑問を持った御坂は本人に聞いてみることにした

「お兄ちゃん？あんた妹なんか居たわけ？」

「ちげえよ、友達と遊びに来たら困ってみたいだから、聞くとセブンスミストに行きたかったらしくてな。連れてきたんだ」

なるほど、と御坂は頷く。女の子はずっとニコニコしている

「あれ？一緒にいたお姉ちゃんは？」

「あ、置いてきちゃった」

あーあー、と刻は困ったように言う。すると向こう側から女性の声がかかる、刻は吹寄とこっちに呼んだ。女性はこちらに気づくとゆっくりと歩いてきた

「全く、勝手に離れちゃダメでしょ？」

「う、ごめんなさい」

女性が軽く注意すると女の子は肩を落として謝罪した

「悪いな吹寄、面倒見てもらって」

「いいのよ。それに、子供ができたみたいで楽しいわ。勿論、二麻との、ね」

吹寄と呼ばれた人物は衝撃発言をする。ピシッと御坂は固まる

「え、ちょ、な。あ、あんた彼女いたの!？」

「なんでそんなにショック受けたみたいな顔してんだよ」

「うっさい!いいから答えなさい!」

この女は刻にとって彼女かそうでないのか、御坂にとってはそれが一番重要だった。刻は鬱陶しそうに顔を歪めた

「まあ、そうなのかそうでないのかと聞かれれば、答えはNOだな」

「そ、そう…よかった」

「私的には付き合ってもいいんだけど」

「勘弁してくれ」

刻の恋人ではないと安心しきった御坂に最後の二人の会話は聞こえなかった

「それじゃあ私は行くわ、行こっか？」

「うん！お兄ちゃん、またね！」

二人は服を買いに二階に上がっていった、その時

「あれ、辻麻さん？」

「ん、佐天か。いたのか？」

先日出会ったばかりの佐天が手にビニール袋を持ってそこにいた

「まあさつきまで初春と下着売場に行っていましたから。でもなんで江麻さんがここに？　ここ女性専用ですよ」

「ちょっと人助けでな。あれ？初春は？」

「ああ、初春ならそこで電話を」

そう言って佐天は電話をしている初春を指す、初春はなにか深刻そうな顔をしていた

「なにかあったのかな？」

佐天のその言葉に刻はさあとしか答えられなかった。そして電話を閉じる

「佐天さん！御坂さん！」

「初春さん？どうしたの？」

何やら深刻そうな顔をして走ってくる初春に御坂は首を傾げた

「次の『虚空事件』の場所はここです！　すぐに避難を！」

その場に驚愕が走る、それを聞いた客は悲鳴を上げて我先にと逃げ出す

「バカ！　ここでそんなことを大声で言うんじゃないよ！」

「す、すいません！」

刻は舌打ちをして三人に作戦を言う、それは今現在冷静な人を集めて皆の誘導をするというもの。佐天も参加することに初春は反対したが、刻が無理矢理黙らせた

「こっちは終わったぞ！」

「こっちもよ！」

「皆ありがとう、あとは避難してくれ」

手伝ってくれた人達にお礼を言って、自分も走り出す刻。その時、向こう側から吹寄が走ってくる

「辻麻！」

「吹寄！？なんでここに、逃げろって言っただろ！」

「あの子を見てない！？探してもいないのよ！」

なっ、と刻は言葉をつまらせる。一階二階は刻が見た限りではいなかった。なら残ってるのは初春と御坂が担当している三階

「（くそ！いつ爆弾が爆破するか分からないこんな時に！）大丈夫だ、すぐに連れて帰ってくる。吹寄は外で待ってる！」

吹寄の返事を聞かず、刻は全速力で三階へと向かった

一階を越え、二階を越え、そして三階。刻が見た光景は御坂と初春そして女の子の前で蛙の人形がまるで何かに吸い込まれているように圧縮されているものだった

「（あれが爆弾か！？くそが間に合え！）」

刻は全速力で三人の前まで走る。そして、爆弾は弾けた

ドオオオオオんツツツツツツツ！！！！

と世界から音が消えた、なんとか間に合った刻は右手を突きだし、
呟いた

「ゲート、オープン」Y R 『」

その時、刻の右手の甲に何かの刻印が表れる。すると、炎の爆流は
まるで壁に遮られたようにその進路方向を変える

そして光がその場を包んだ

そのあとの話である。犯人は無事捕まり、事件は終わりを告げた。けれどそのあと刻の力を見た御坂が勝負を挑んだことは言うまでもないだろう

なんとか御坂から逃げ切った刻は部屋についたあと、泥のように眠ってしまった

しかし、物語は狂おうとしていた。夏休みに交差する物語は

不十分なまま、交差しようとしていた

「…………おなかすいた」

魔術と科学が交差するとき、物語は始まる

第四話『日常i n 非日常』（後書き）

なんかグダグダ…いつものことか。吹寄さん、どうしてこうなった？

そして刻の力の一片が出てきました、果たして刻の能力とは？

まあ、既に気づいてる人はいっぱいいるでしょうけどね

次回、第5話『高校生i n 禁書目録』

次回もその目に刻みつける！

第五話『高校生in禁書目録』（前書き）

イン何とかさん参上！の巻き

先に言っておきます、今回は捏造ネタが多いです

イン何とかさんはこんなじゃねえ！とかえ？何その無茶苦茶の設定

なんて表現がざらにあります、お気をつけを

それでは今回もキバっていくぜ！

第五話 『高校生in禁書目録』

それは、いつもと変わらぬ朝の出来事。刻は大体朝の七時には起きる、特に深い理由はないが、パツと目が覚めるのだ

まず起きて一番にすることは顔を洗い、歯を磨くこと。そのあとに着替えて軽い朝食を取る

そして登校前に布団を干す、いつもと変わらない普通の朝だった

ベランダに干されている、銀髪の少女を見るまでは

……沈黙、ひたすらの沈黙。何故？どうしてどうやって？考えが纏まらない。しかしその着ている服には見覚えがあった

シスター服、つまりはキリシタンだ。着ているということはどこかの宗教に入っているということ

身体中に付けられた傷が疼く、同時に嫌な思い出も疼く

その時、少女が呟いた

「…………おなかすいた」

と、刻は呆気をとられたあと財布を見る。残金4056円はつきり
言って食料を買う金は残り少ない

「…………おなかすいたって言うてるんだよ？」

「…………アツチヨンブリケー……」

刻は嫌な予感を感じながら、そう呟いた

「…………ちそうさま！おなかいっぱい食べれたのは久しぶりかも！」

「…………そうかよ」

銀髪シスターが食べた量、しめて一週間分の食料なり。刻はまだ見
ぬ未来が目に見え、声を殺してさめざめと泣いた

「で、なんで俺の朝飯まで食ってんだよ？俺を餓死させたいのか？」

「あ、そういえば自己紹介がまだだったね！私はインデックス、あなたは？」

話聞けよ、と刻は心の中でつつこんだが諦めて自己紹介をした

「刻だ、辻麻刻。それで、何でベランダに干されてるんだよ。ダイビングでもしたか？」

「うん？違うよ、追われてたんだよ。魔術結社に」

ピシッと辻麻は固まる、なんかとんでもないものに追われてやがる！と心で叫んだ。しかしインデックスにはそれが理解出来てないとられたのかインデックスは口を開く

「あれ。通じなかった？魔術結社だよ、マジックキャバル」

「あー、充分伝わってる。これ以上ないってくらいに。ハア…最近貧乏くじ引くの多いな、俺」

誰に話すというわけでもなく刻は呟いた。だが、こんなことをしている場合ではない。とりあえず、前々から付けておいた『仕掛け』を使う

周りに気配はなし、だが2キロ先に　　の気配あり

と情報が頭に流れ込む。ハア…と刻はさらに溜め息をつく。その様子にインデックスは首を傾げるが、気にせず話を続けた

「それでね、聞きたいことがあるんだ」

「……………んだよ」

更なる不幸な予感を感じながら刻は聞き返した。その返事にインデックスは期限をよくし、こう言った

「じはんって何処で食べられるの?」

「……………は?」

夏の日差しが照りつける中、学生なら授業を受けている時間帯。刻は周りから見れば明らかに怪しい服装をしたシスター、インデックスを連れて歩いていた

「きざみ、わたしお腹がへったかも」

「……………さっきアイスクリーム食ったろ。我慢しろ」

先程食べたアイスクリームのコーンを口周りにつけたインデックスが刻に訴える。刻は勿論申請を却下する

「うー、きざみそればっか！おなかすいたおなかすいたおなかすいたー！」

「だあー！暑いんだから！叫ぶな喚くな！」

ジタバタし始めたインデックスに刻は暑くなることを分かっているから限界まで叫んだ

周囲の視線は何故か暖かった

「やめよう、余計暑くなる」

「…うん、おなかすいた」

「ハア…とりあえず。どうするんだ？追われてるんだろ？」

どこのどいつだか知らねえけどよ、と刻はインデックスの方を向いた。インデックスは俯いて口を開いた

「…うん。出来れば外に出て教会の方に行きたい」

「そっか…」

インデックスは言うが、日本に協会があるのか？と聞かれればはっきり言って無いようなものである。学園都市サイエンスに教会オカルトが存在するはずがない

ならば外、と言っても。ここ近年、物事の現象は全て科学で証明出来る世界だ。神頼みなんて、そんなことをするより確率や統計で調べた方が早い

「となると、行き先はロンドンか？」

「そうなるかな」

インデックスは平然とそう言うが、ロンドンと日本の距離は約9600?。乗り物無しでは行ける距離ではない。それにインデックスが入っているのはイギリス清教だ。それ以外の教会に入ろうものなら門前払いだ

「…：そういえばお前ID持ってんのかよ？」

「ID?なんの？」

ダメだこりゃ、と刻は頭を押さえる。この町、学園都市に住む人々は必ず個人を証明するためのIDを持っている。それがなければ外にも出れないし、物さえ買えない。その事をインデックスに伝えると

「え?そうなの!?...：だ、大丈夫、いざという時は魔術を使うから」

「コラ」

科学の街で魔術を使うな、と刻はインデックスに釘を打つ

「あー、たく…そうだ、俺も着いていつてやるうか？」

お前だけじゃかなり心配だし、刻はベンチに座りインデックスに言う

「…ダメだよ。何で刻が魔術を知ってるのか知らないけど、一般人は巻き込めない」

「…たく。あのなー、お前一人だったら金があっても使いきるかも知れないし、もしかしたら道に迷うかもれない。そんな危なっかしい奴を放っておけるかよ、だから「じゃあ「あん？」」

インデックスは俯き、か細い声で刻の言葉を遮った。そして顔をあげて、こう言った

「私と一緒に…地獄まで着いて来てくれる？」

「ッー！」

そう言ったインデックスの表情は笑顔だった。とびきり、痛そうな笑顔。刻は思わず言葉が出なくなった

しかし

「…………たく」

ズビッ！と刻はインデックスの脳天にチョップをかます

「あいた！な、何するの！？」

インデックスは涙目で訴えるが、刻はうるせえよと悪い子供を叱るような声で言った

「そつだな地獄なんてもう行きたくもない」

その言葉にインデックスは少しショックを受けたような顔をする、刻はさらに言葉を続けた

彼女はあの笑顔で言っていたのだ、『こっちに来るな』と。こっちら先は地獄だと

普通の人ならまず関わらない。それこそ、インデックスを拒絶するかもしれない

「けどな」

しかし

「けど。もし、その…テメエがそこから手を伸ばしてるってんなら」

その程度でインデックスを捨てるほど

「俺がその手引っ張って、そこから引っ張り出してやることぐらいは出来るぜ？」

訳あり高校生は臆病者ではない

「だから、そんな顔をすんな。いざという時は俺がそいつらをちよちよいとやっつけてやるよ！」

刻はその手をインデックスの頭に乗せて優しく撫でた

出会ったのはほんの数時間前だ、情なんてありはしない。けれど、守りたい。例え敵がどんなにか強くても、あの笑顔だけは、守ってやりたい

暖かい、インデックスは思った。これほど心が暖まったのは初めてだった

インデックスには記憶がない。しかし物の使い方、しゃべり方、歩き方、そんな常識を忘れたのではない

忘れたのは、思い出。家族の、友人の、他人の、全てが消え去った。目を覚ませば路地裏、振り替えると敵。ずっと逃げてきた、時に傷つき裏切られ、そして時に傷つけた

なんの確かもなく、迷いこんだ学園都市。そこでも拒絶され、傷つけられ。されど誰も恨むことができなかった

地獄だった、信用出来る者など一人もいなかった。まるで、自分以外が敵に回った気がした

そんな彼女の前に現れた希望、楽しかった。初めて他人の手料理を

食べた、初めて他人と食べ歩き回った、初めて他人と言い合いをした。そして初めて他人の暖かさを感じた

滲む視界、震える体、そしてたまる涙

ああ、この人なら、きっと

「う、うあああああ！！！！」

きっと、救ってくれる

インデックスは初めて、人前で泣いた

「もっいいいのか？」

「うん、ありがとうごさねみ」

目元が赤い彼女はそう言った。あれから少したった、大声で泣き始めたインデックスを慌てながらも刻は無言でずっと抱き締めていた。ひとしきり泣いたあと、心なしか少し吹っ切れたような顔をしているように見える

「んじゃあ、もうこんな時間だし。帰るか」

「あ…うん、そうだね」

落ち込むインデックスだったが、仕方がない。彼には家がある、自分にはないものだ。なら、この分かれは必然的なんだ

「？何落ちこんでんだよ、お前も帰るんだぞ」

「え？」

当たり前だろ？と言わんばかりの表情と声に、インデックスは顔をあげた

「な、なんで？わ、私は別に」

「お前放っておくと何しでかすか分からないからな。それに」

「守ってやるって言ったろ？帰ろっぜ、”俺ら”の家に」

夕陽をバックに刻は満面の笑みでインデックスに手を差しのべた

その手を取っていいのかは分からない、自分はいらただけで皆を傷つけてしまうから、自分は罪の塊だから

でも、もし、神様が、この情景を見ているなら、一言だけ言いたい

「うん！」

”今だけ、この幸せを味あわせてください”

第五話『高校生in禁書目録』（後書き）

はい、言いたいことは分かっています

もう二度とシリアスは書きたくありません

インデックスフラグはこれにて建設完了！

ちょっと簡単過ぎたかな？いや、いつものことか

次回、第6話『高校生inシナリオ』

次回もその目に刻みつける！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2235y/>

とある運命と刻印之者

2011年11月22日03時58分発行